

七つの例祭

ジェイコブ・プラッシュ

ついで主はモーセ [モーシェ] に告げて仰せられた。

「イスラエル人に告げて言え。第七月の第一日は、あなたがたの全き休みの日 [この休みという言葉に使われているヘブライ語は会合という意味を持ち、安息です]、ラッパを吹き鳴らして記念する聖なる会合である。どんな労働の仕事もしてはならない。火によるささげ物を主にささげなさい。」

ついで主はモーセに告げて仰せられた。

「特にこの第七月の十日は贖罪の日、あなたがたのための聖なる会合となる。あなたがたは身を戒めて [ヘブライ語：ラアノット ナフショット ケム (*la'anot naphshot chem*) ——文字通りには (この日に) たましいを苦しめ、悩ませるということ]、火によるささげ物を主にささげなければならない。その日のうちは、いっさいの仕事をしてはならない。その日は贖罪の日であり、あなたがたの神、主の前で、あなたがたの贖いがなされるからである。その日に身を戒めない者はだれでも、その民から断ち切られる。その日のうちに仕事を少しでもする者はだれでも、わたしはその者を、彼の民の間から滅ぼす。どんな仕事もしてはならない。これは、あなたがたがどこに住んでいても、代々守るべき永遠のおきてである。これは、あなたがたの全き休みの安息である。あなたがたは身を戒める。すなわち、その月の九日の夕方には、その夕方から次の夕方まで、あなたがたの安息を守らなければならない。」

ついで主はモーセに告げて仰せられた。

「イスラエル人に告げて言え。この第七月の十五日には、七日間にわたる主の仮庵 [幕屋] の祭りが始まる。最初の日には聖なる会合であって、あなたがたは、労働の仕事はいっさいしてはならない。七日間、あなたがたは火によるささげ物を主にささげなければならない。八日目も、あなたがたは聖なる会合を開かななければならない。あなたがたは火によるささげ物を主にささげる。これはきよめの集会で、労働の仕事はいっさいしてはならない。」

以上が主の例祭である。あなたがたは聖なる会合を召集して、火によるささげ物、すなわち、全焼のいけにえ、穀物のささげ物、和解のいけにえ、注ぎのささげ物を、それぞれ定められた日に、主にささげなければならない。このほか、主の安息日、また、あなたがたが主にささげる献上物、あらゆる誓願のささげ物、進んでささげるあらゆるささげ物がある。

特に、あなたがたがその土地の収穫をし終わった第七月の十五日には、七日間にわたる主の祭りを祝わなければならない。最初の日は全き休みの日であり、八日目も全き休みの日である。最初の日に、あなたがたは自分たちのために、美しい木の実、なつめやしの葉と茂り合った木の太枝、また川縁の柳を取り、七日間、あなたがたの神、主の前で喜ぶ。年に七日間、主の祭りとしてこれを祝う。これはあなたがたが代々守るべき永遠のおきてとして、第七月にこれを祝わなければならない。あなたがたは七日間、仮庵に住まなければならない。イスラエルで生まれた者はみな、仮庵に住まなければならない。これは、わたしが、エジプトの国からイスラエル人を連れ出したとき、彼らを仮庵に住ませたことを、あなたがたの後の世代が知るためである。わたしはあなたがたの神、主である。」こうしてモーセはイスラエル人に主の例祭について告げた。（レビ記 23 章 23 節－44 節）

イスラエルの暦（カレンダー）

これがイスラエルの暦の概要であり、ヘブライ語では“ルアク（*luach*）”と呼ばれます。ヘブライ人の暦は太陽暦ではありません。ヘブライ人の暦は太陰暦であり、1 か月は 28 日になっています。イスラエルの宗教的・民衆的な生活はすべてこの暦に定められており、それには三重の機能が備えられていました。

ヘブライ人の暦は

- 民衆の暦であり
- 宗教、また礼拝に関する暦であり
- 農業のための暦でした

このヘブライ人の暦というテーマはひとつのメッセージでは書ききれない多くの内容を含んだものです。例えば実際のヘブライ人の月や、どの方向に風が吹くか（ヘブライ語で“風”と“霊”は同じ言葉だからです）などがあります。私はただレビ記 23 章に出てくる 3 つの例祭の基本的な概略だけを見ていこうと思います。

神さまが例祭をこの順序で与えられたのには 3 つの理由があります。

まず第一に、この暦は異教に対しての反証でした。カナン人は同じ日に祭日を設け、その期間に収穫や太陽、雨などのために偽りの神々に感謝をささげていました。（申命記で偽りの神々は“シェディーム（*shedim*）”つまり“悪霊”と呼ばれています。1 コリント 10 章 20 節は“ダイモニオン（*daimonion*）”というギリシア語が使われています）神はヘブライ人が**真実の神**を礼拝し、感謝することを望んでおられました。このように神の定められ

た例祭は異教に対する反証だったのです。

神がヘブライ人にこの暦を与えられた第二の理由は、昔、神が自分たちにしてくださったことを思い起こさせるためでした。それは信仰を育むひとつの方法であり、これらの例祭は過去の出来事の記念となっていました。例えば、過越の祭り（ペサハ）はイスラエルのエジプトからの救いを祝うものであり、仮庵の祭りは荒野において神が供給されたものを祝う祭りです。神は年ごとに、昔ヘブライ人の必要に応えられたことを思い起こさせ、現在、未来と神を信頼する信仰を強めたいと願っておられるのです。

私たちはある決まった祭日を祝ったり、祝わなかったりしますが、この原則はクリスチャンにも当てはまるものです。私たちは絶えず、自分たちの人生で神さまが満たしてくださった必要を思い出すべきです。過去に神が必要を満たしてくれたことを思い出すことによって、私たちは現在と未来に対して神を信頼する信仰を新しくします。私はヘブライ人の暦に従いなさいと言っているわけではありません。私が言いたいのは、神がすでにされたことを思い出すという原則は、現在と未来のために信仰を強めるひとつの方法であるということなのです。神が前回私たちの必要を満たしてくださったのなら、同じ神はもう一度それをするのができ、またそれをなされるのです。

神がヘブライ人にこの暦を与えた第三の理由は、この暦が神学者によって“ハイルスゲヒシテ (*heilsgeschichte*)”——“救いの歴史”と呼ばれるものの象徴であるからです。ヘブライ人の暦はメシアがなされることの象徴であり、前兆であります。

主イエスは最初の到来において春の祭日を成就されました。それは過越の祭り、初穂の祭り、七週の祭りです（七週の祭りはペンテコステとして知られています）。主イエスは再臨において秋の祭日、つまり角笛を吹き鳴らす祭り、贖罪の日（ヨム・キプール）、仮庵の祭り（ハグ・スコット）を成就されます。

過越の祭り

過越の祭り——ペサハから見てみましょう。カトリックの学校に通った人ならこの日を「*Ecce Agnus Dei, qui tollit a mundi*（エクセ アグヌス デイ、クイ トリット ア ムンディ）」というヨハネ 1 章 29 節『見よ、世の罪を取り除く神の小羊』からの言葉とともに祝ったことでしょう。1 コリント 5 章 7 節では『私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられた』と言われていました。過越のいけにえは傷がなく完全な子羊でなければなりませんでした。

過越の祭りの前日、サンヘドリンは可能性のあるさまざま欠陥を74箇所に至るまで調べ上げました。子羊が欠陥のないものだとわかれば、サンヘドリンはいけにえに適しているとして通過させたのです。彼らは子羊を連れ出し、ほふりました。その同じ日にサンヘドリンはある子羊に欠陥がないかを調べていました。主イエスが裁判にかけられていたのです。そして神の子羊に傷や欠陥がないと分かると、イエスを連れ出し、子羊がほふられるちょうど同じ日に十字架にかけました。これとともに種なしパンの祝い、ユダヤ人がパン種を食べない過越の週が始まります。

パン種はさまざまな形で罪の象徴です。今に至るまで中東では東洋系のユダヤ人の女性は“サワードウ手法”でパン種を入れたパンを焼きます。彼らはひとかたまりのパンを焼く前に生地入れから生地を少し取り、丸くこね、次の生地入れに入れます。彼らはそれを繰り返します。これはイースト菌がとても短い間に胞子を作り、増殖するからです。同じように罪の影響は何世代にも続いていくものです。それだけでなく罪はふくらみます。1コリント5章6節を見てみましょう。

『あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。新しい粉のかたまりのままにしているために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたはパン種のないものだからです。私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。』

パン種をきれいに無くし、罪を取り除きなさい。ユダヤ人が過越の祭りを祝う前にはパン種は取り除かれなくてはなりません。さて「あなたがたの高慢は、よくないことです」と書いてありますが、パン種のすることといえば何でしょうか。パンを膨らませることです。

高慢は他の罪に力を与え、罪を引き起こすものです。怒りが抑えられない問題を抱えた人の、その罪の後ろには高慢があります。欲望が抑えられないという問題を抱えている人がいますか。その背後には高慢があります。貪欲の問題ですか。その後ろには高慢があるのです。

「あの人はプライドでいっぱいである」という言葉はプライドがどのように膨れ上がって、自滅に至るかを描き出しています。そのプライドのためにサタンは神のようになろうとしました(イザヤ14章13節-14節)。しかしそれにとどまりません。イエスは『パリサイ人のパン種…に十分気をつけなさい』(マルコ8章15節)と言われました。偽りの教理は罪であり、偽りの教理を信じ続ける者のプライドの中に根ざしているものです。パン種を除いてください。

種なしパンの祝いにはイスラエル人はパン種の入れないパンしか口にしてはならないと神は命じられました。タルムードではパン種の入れないパン（マッツァー）は筋が入れられ、刺し通されなければならないと書かれてあります。今日、自分たちのメシアを知らないユダヤ人たちはこれがイザヤ 53 章 5 節『彼の打ち傷によって、私たちはいやされた』に関して語られているのを理解していません。また 1 ペテロ 2 章 24 節はこれに関連しています『キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです』。

イエスのうちにパン種はありませんでした。誇るべきものを持っていた唯一の方がプライドを持っていませんでした。イエスのうちに罪はなく、何の偽りの教理もありませんでした。

過越の週

過越が種を入れないパンの週の始まりとなります。その週の初めの日（週の安息日の日没から次の日没まで）が初穂の日です。

『しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。』（1 コリント 15 章 20 節）

過越の週の最初の日、初穂の祭り（これはいつも日曜日）では大祭司が神殿の丘とオリブ山の間に位置するキデロンの谷へ下っていきます。大祭司はちょうど日の出のときに、地から生え出た最初の穀物を収穫します。そしてまさに日の出のとき、それを神殿に持っていくのです。四福音書すべてがイエスは日の出とともによみがえったとあります。御子（*Son*）が復活することは聖書の象徴において、太陽（*Sun*）が昇ることに例えられています。大祭司が初穂を運んでいたまさにその時、主イエス——メシア——は復活の初穂となっていたのです。

ペンテコステは七週間後にやってきます。これはもちろん、屋上の間にいる弟子たちに聖霊がお降りになった時のことです。

過越の週にはシナゴークで雅歌が朗読されていました。私たちは雅歌をヘブライ語で“ハシェル・ハシェリム（*Ha Shir Hashirim*）”と呼びます。それはヘブライ人の聖典で年ごとに読まれている5つの巻物（メギロット *megilot*）の中のひとつでもあります。ソロモンとシュラム人の女との恋愛を描いた雅歌は、神とイスラエルの関係、キリストとその花嫁、教会との関係の隠喩です。雅歌の中心は二つの夢にあります。3章で花嫁が花婿を

迎える備えが出来ているときは最高の夢ですが、5章では花婿を迎える備えが出来ていないひどい悪夢となっています。この雅歌が朗読されているまさに同じ週に、イエスは「賢いおとめと愚かなおとめのたとえ」をもってその意味を説明されました（マタイ 25 章 1 節 - 13 節）。花婿が来る時、それはあなたにとって最高の夢、あるいはひどい悪夢となります。イエスのたとえはこの背景から語られていました。

七週の祭りの間はルツ記“ハメギラット・ルツ (*Ha Megillat Ruth*)”がシナゴークで朗読されています。ルツ記とはどのような書でしょうか。富を持ち、権力のあるユダヤ人が異邦人の花嫁をめとり、彼女の地位を引き上げる話です。ルツはイエスを信じる異邦人信者たちの象徴です。七週の祭りは春の収穫の時期に行われます。思い出してほしいのがこの暦は農業用でもあったということです。ペンテコステの日に救われた3千人は最初の収穫でした。

神の世界に対する日時計

イスラエルは神の定められた世界の日時計です。そしてその日時計は農業周期に基づいて動きます。イスラエルには2つの雨季があります。“前の雨”また“後の雨”というのを聞いたことがないでしょうか。この“雨”とは何のことなのでしょう。ヨハネ 7 章 38 節から 39 節を見るとイエスはこう言われています。「わたしはあなたに生ける水（マイム・ハイム）をあげよう」イエスは生ける水が何であると言われたのでしょうか。『これは、…御霊のことを言われたのである』イエスが井戸のそばの女に「生ける水（マイム・ハイム）を与える」と言われたとき、聖霊を指して言われていたのです（ヨハネ 4 章 10 節）。イザヤ 44 章 3 節を見ると、『わたしの霊をあなたのすえに、わたしの祝福をあなたの子孫に注ごう』と書かれています。雨は地下水となり、マイム・ハイム（生ける水＝湧水）を生み出します。これは聖霊が溢れ出すことの象徴です。

聖書の予型において、さまざまな液体は聖霊のさまざまな働きを象徴しています。例えば、イザヤ 24 章 7 節では“新しいぶどう酒”について書いてありますが、それは聖霊を賛美の面で表しています。“ミシュカハ (*mishchah*)”や“シェメン (*shemen*)”——聖霊の油注ぎは油に象徴されています。一方でここでは聖霊が溢れ出すことについて書かれています。神がご自分の御霊を降り注がれるときそこには収穫があります。雨がなければ穀物は実りません。

イスラエルにはだいたい、3月の終わりや4月の初めから始まり、8月いっぱいまで続く長く、とても暑い夏があります。その時期はとても暑く、また雨が少ししか降りません。ここに少し、あそこに少しというようにです。イスラエルは農業のために、ヘルモン山

からの雪解け水や、ガラリヤ湖にすでに蓄えられている水、フルダ一流域の水に頼っています。しかし雨季は再び秋に始まり、またその時期に刈り入れがあり、多くの食物の収穫期となります。

このことを考えてみましょう。まずはじめにイスラエルは神の世界に対する日時計です。夏の時期は“異邦人の時”（ルカ 21 章 14 節）と関係があります。私が考える限りでは、異邦人の時とは預言者ダニエルの書いた 69 週と 70 週の間期間であり、教会が主に異邦人で占められている時代のことです（訳注…ダニエル 9 章 26 節）。しかし、その後神は終わりの日において、ユダヤ人に恵みを戻し始めます。このことが理解できるとふたつのことが分かります。ひとつは、なぜ教会の始まりには多くのユダヤ人がいて、またローマ 11 章で読めば分かるように、終わりの時代にも多くのユダヤ人が救われるのかということです。一方で、私たちの理解を助けてくれることのふたつ目のことは、初代教会においてなぜあれほどの豊かな聖霊の賜物が与えられ、それが徐々に衰えたかのように見えたが、再び終わりの日にまた現れるかです。聖霊の賜物は完全に止まったわけではありません、しかし、徐々に衰えていったのです。

『わたしはまた、刈り入れまでなお三か月あるのに、あなたがたには雨をとどめ、一つの町には雨を降らせ、他の町には雨を降らせなかった。一つの畑には雨が降り、雨の降らなかった他の畑はかわききった。』（アモス 4 章 7 節）

もうお分かりでしょうか。神は聖霊をここやあそこに降り注がれますが、世界的には降り注がれません。しかし、教会の初めにおいては全世界的な降り注ぎがありました。そして終わりの日に、第二の雨は最初の雨より偉大なものとなるのです。

“後の雨運動 (*Latter Rain*)” という異端の教え、また“神の子たちの現れ”という問題のひとつは、それが全くの嘘ではなく、聖書の真理を歪曲したものであるということです。

「一つの町には雨を降らせ、他の町には雨を降らせなかった」今アメリカは干ばつに襲われていないでしょうか。そこは雨が降らず、かわききっています。

最近、私たちが開いた集会で伝道的なメッセージが行われ、それに対する応答がありました。2 人の人が救われたのです。神さまを賛美しましょう。その同じメッセージがベネズエラで行われていたなら、200 人が救われていたことでしょう。雨はアフリカで、またイタリア、フィリピンで降り注いでいますが、プロテスタント系ヨーロッパや北アメリカは干ばつに襲われています。「一つの町には雨を降らせ、他の町には雨を降らせなかった」

そのように神は今の時代を扱っておられます。

さて、雨をこの観点で考えると、エレミヤ書で神が雨をとどめられた時、それをさばきとしてなされたことが分かります（エレミヤ 3 章 3 節、14 章 4 節）。収穫が来ない理由のひとつは、墮落し、物質主義に陥った教会に対するさばきのためです。それはともかく、このことは軽く触れるだけにしましょう。長く暑い夏の後、秋の季節が始まります。

主イエスは最初の到来において春の祭日を成就されました。また再臨において秋の祭日を成就されます。ユダヤ教ではメシアに関してふたつの描写があります。それは“ハマシアハ・ベン・ヨセフ (*HaMashiach Ben Yosef*)”と“ハマシアハ・ベン・ダヴィード (*HaMashiach Ben David*)”、つまり“ヨセフの子なるメシア”と“ダビデの子なるメシア”です。ラビたちはこれを知っており、彼らはふたりのメシアがいると考えています。しかしイエスを信じる者として、メシアはひとりであり、ふたつの到来があることを私たちは知っています。

ひとりのメシア ふたつの到来

創世記に見いだされるヤコブの息子のひとはヨセフです。その名前は“主は加える”という意味です。ヨセフはユダヤ人の兄弟たちから裏切られ、異邦人の手に渡されました。神はその裏切りを好転させ、イスラエルとすべての世界が救われる道として用いられました。同じように、主イエスはユダヤ人の兄弟たちに裏切られ、異邦人の手に渡されました。神はその裏切りを好転させ、イスラエルと全世界が救われる道とされたのです。

ヨセフはふたりの犯罪人とともに罪に定められ、ヨセフが預言したようにひとは生き、ひとは死にました。イエスもふたりの犯罪人とともに罪に定められましたが、預言されたようにひとは生き、ひとは死にました。

ヨセフは兄弟であるイエフダ（ユダ）に 20 枚の銀貨をもって裏切られました。値は上がりましたが、ヨセフの子であるイエスは同じく“兄弟”であったイエフダ（ユダ）に 30 枚の銀貨をもって裏切られました。イエスの養父の名前がヨセフであったことはもうひとつの興味深いことです。

ヤコブの子であるヨセフの兄弟たちは、ヨセフを最初には気付きませんでした。彼らは二度目に気付く、激しく泣きました。ゼカリヤ 12 章 10 節を見てみましょう。

『わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。』(ゼカリヤ 12 章 10 節)

ヨセフの兄弟たちは「これは私たちが異邦人の手に渡した者ではないか。その者が私たちに救う者だったとは」と言いました。同じように、イエスの再臨においてユダヤ人たちは自分たちのメシアを見てこう言います、「これは私たちが裏切った人だ。私たちが異邦人に渡した者が救いをもたらす者だったとは」と。そして激しく泣くのです。

ヨセフは罪の宣告を受ける場所から、栄誉を受ける場所へ1日の間に移されました。主イエスも同じように罪の宣告を受ける場所から、栄光の場所へと1日の間に移されたのです。

ヨセフが栄誉を受けるとすべてのひざは彼にむかってかがみ、ヨセフは異邦人の花嫁をめぐりました。主イエスが栄誉をお受けになると、すべてのひざはかがみ、すべての舌は告白してイエス・キリストは御父の栄光を輝かせる主だと言います。またイエスはその象徴において異邦人の花嫁をめぐったことなどがあります。

このことに関してより詳しい情報は『ひとりのメシア ふたつの到来』という説教に載せられています。今説明したことはその基礎的な事柄です。

最初の到来でイエスは3つの祭日を成就されるメシア、ヨセフの子(ハマシアハ・ベン・ヨセフ)としてやって来ましたが、再臨においてイエスはハマシアハ・ベン・ダヴィード、つまりダビデの子、勝利を得る王としてやって来ます。ユダヤ人がイエスを最初の到来において受け入れなかった主な理由は、メシアにヨセフの子ではなく、ダビデの子として来てほしかったからです。ユダヤ人はろばに乗って来るようなヨセフの子を望みませんでした。彼らは白い馬——またはベンツに乗ったようなダビデの子を望んでいました。つまり政治的なメシアを求めていたのです。言い換えると、当時のユダヤ人は再建主義者でした。ユダヤ人は“神の国は今”という神学を奉じており、キリストの最初の到来に準備が出来ていませんでした。

このことにはさらに多くの事柄が含まれています。(これらのことを詳しく説明している『シュロの主日』という説教を私たちは提供しています)

最初の到来においてイエスは春の祭日を完全に成就しましたが、秋の祭日に関しては部

分的に成就しただけでした。

例えばマタイ 24 章でイエスはエルサレムに起こることに関して警告を与えられました。さて、ユダヤ人の歴史家ヨセフスやエウセビオスを読んだことがある人なら、信者たちが救い出されたときに起こったことを知ることができます、それは携挙と復活の象徴でした。エルサレムに残っていたユダヤ人に対して起きたことは、教会が救いだされたときに大患難を経験する者たちに起こることの象徴です。これは最初の到来においてただ部分的に成就されました。

次に贖罪の日があります。ヘブル 9 章 7 節にはイエスは至聖所に入られたと書かれています。イエスは最初の到来で贖罪の日を部分的に成就しました。そして当然、仮庵の祭りもそうされたのです。ヨハネ 7 章はエゼキエル 47 章——ヘブライ語で“シムハット・ベイト・ハショイバー (*simchat beit ha'shoyivah*)” と呼ばれるイメージから取られています。ヨハネ 7 章でイエスは「わたしのもとに来なさい。あなたたちに生ける水を与えよう」と言われました。この時代のユダヤ人にはシロアクの池から水を取り、神殿の丘で注ぎ出すという伝統がありました。イエスはヨハネ 7 章において仮庵の祭りを成就されましたが、それはただ部分的に成就しただけです。秋の祭日を完全に成就されるのはダビデの子なのです。

この長く、暑い夏を通り過ぎると、また雨が降る季節になります。ワディ（雨期以外に水のない川）は鉄砲水の流れる場所となります。聖霊は野に火のように広がり、地は咲き乱れ、もうひとつの収穫が訪れます。

もう一度いいますが、イスラエルは神の世界に対する日時計です。では使徒ヨハネはなぜ「イエスの来られるときは近い」とか『小さい者たちよ。今は終わりの時です』（1ヨハネ 2 章 18 節）と言っているのでしょうか。このことはユダヤ人のように理解しなければなりません。

ある夫が 6 時に終わる予定のサッカーの試合を見ていたとしましょう。奥さんが「何時に夕飯食べたい？」と聞くと、「試合の後でいいよ。6 時に終わるんだ」と言い、「いいわよ」と返事は返ってきます。しかし試合も終盤になり、6 時まであと 10 分と迫ったところにひとりの選手が大きな怪我をします。審判は時計を止め、医療チームが出て行って言います、「動かさないほうがいい。医者を呼んでこよう」また医者が飛んできて言います、「いや動かさないほうがいい。救急車を呼ぼう」さあ、もう時間は 6 時から 10 分過ぎていて、あなたの奥さんはこう言います、「ご飯できてるけどレンジで温める？それとも犬にやったほうがいいの？くだらないサッカーの試合なんかいつまで続くのよ」そこであなた

は言います、「いや、あと試合に 10 分残ってるんだ」

「そうね。でも 20 分前にも試合の残り時間は 10 分だったわよ」

時計は止まったのです。それからずっと 6 時まで残り 10 分です。時計の針はずっと深夜の鐘を鳴らすのを待っているようです。これが異邦人の時です。神のときが満ちると時計は動き始めます。今中東で起こっている出来事、また多くのユダヤ人が救われていることを見ると、時計の針が動き出していることが分かります。

角笛を吹き鳴らす祭り

ここに注目してください。秋の祭日は 3 つあります。その最初のもは角笛を吹き鳴らす祭りです。ラビたちはこの祭りの意味を変えてしまいました。彼らはこれを“ロシュ・ハシャナー（年のあたま）”、“ユダヤ人の新年”と名付けました。しかし実際、レビ記 23 章を読んでみると年の始まりはロシュ・ハシャナー——角笛を吹き鳴らす祭りではありません。年の始まりはニサンの月であり、ヘブライ人の最初の月は過越の月です。ラビたちは角笛を吹き鳴らす祭りを取り上げ、聖書の教えとは非常に異なったものとしてしまいました。角笛を吹き鳴らす祭りの意味は“*Happy New Year*”ではなく、“オイブ・ヴォイ *Oy v'voy*”——つまり“悲しみに悲しめ”という意味なのです。

『角笛を口に当てよ。驚のように敵は主の宮を襲う。彼らがわたしの契約を破り、わたしのおしえにそむいたからだ。』（ホセア 8 章 1 節）

人々が角笛の音を聞いたとき、町の中にいる人はわななくと書かれてあります（アモス 3 章 6 節）。

『シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。この地に住むすべての者は、わななけ。主の日が来るからだ。その日は近い。やみと、暗黒の日。雲と、暗やみの日。山々に広がる暁の光のように数多く強い民。このようなことは昔から起こったことがなく、これから後の代々の時代にも再び起こらない。彼らの前では、火が焼き尽くし、彼らのうしろでは、炎がなめ尽くす。彼らの来る前には、この国はエデンの園のようであるが、彼らの去ったあとでは、荒れ果てた荒野となる。これからのがれるものは一つもない。』（ヨエル 2 章 1 節 - 3 節）

こうした内容は続いていきます。この章の終りにさしかかると、ペテロがペンテコステの日に引用したヨエル 2 章 28 節に至ります。

『その後、わたしは、わたしの霊をすべての人に注ぐ…』(ヨエル 2 章 28 節)

ここで、このテーマに関連した偽りの教えを指摘しなければなりません。

本質的に一種のニューエイジ・ムーブメントであり、聖書的キリスト教の皮を被った異端的な“ヴィンヤード運動”の中で、ジャック・ディアーに支援されたジョン・ウィンバーの基本的な教えは“神の子たちの現れ”“後の雨”“勝ち誇る教会”などがヨエル 2 章 2 節に登場する偉大な軍勢であるというものです。(この人たちはこの偉大な軍勢が勝ち誇る教会であり、それがキリストのために世を征服すると教えています)しかし、歴史的な背景を考えるとこの軍勢はネブカドネツアルの軍勢であることが分かります。終わりの日に関してこれが意味することはどうであって、聖書解釈と歴史的背景から見て、これはネブカドネツアルの軍勢の特徴を備えているのです。ヨエル 2 章 20 節を見てみましょう。

『わたしは北から来るものを、あなたがたから遠ざけ、それを荒廃した砂漠の地へ追いやり、その前衛を東の海に、その後衛を西の海に追いやる。その悪臭が立ち上り、その腐ったにおいが立ち上る。主が大いなることをしたからだ。』(ヨエル 2 章 20 節)

神がさばき、滅ぼそうとする軍勢の中に入りたいでしょうか。もしそうなりたければヴィンヤード運動に参加してください。そうすると神がさばかれ、滅ぼそうとしておられる軍勢に入ることができるでしょう。彼らは自分たちがそうであると考えているからです。もちろんこれは公然とした異端の教えです。“角笛を吹き鳴らせ”というのは“さばき”であって、キリストの再臨が近づいていることと、それに続くさばきを知らせるものなのです。

これは“タシュリク (*Tashlik*)”、人々が自分たちの罪を流れる水へ投げ込むことによって、罪を取り除こうとする儀式をもって始まります。

数年前、私がロシュ・ハシャナーの時期にイスラエルにいたとき、ユダヤ人たちはイエスが盲目の男を癒したシロアクの池で“タシュリク”を行っていました。そこで正統派ユダヤ人たちが自分の罪を取り除こうとしていました。私の祈りはただ、イエスキリストが再びその盲目の人たちの目を開いてくださることでした。しかし教会が目の見えないような状態なら、ユダヤ人に何を期待することができるでしょうか。とはいえ、角笛を吹き鳴らす祭りはこのようにして始まります。

私が説明できることは他にも多くありますが、率直に言って完全に理解しきっていないこともあります。誰かがダニエル書全体、エゼキエル書全体、また黙示録全体を解明したというとき、いつもそのような人を私は用心しています。なぜなら「あなたは終わりの時

まで、この書を封じておけ。後に神が解き明かそう」と書かれてあるからです（ダニエル 12 章 4 節）。それらの書はより明らかになり、完全に明らかになるでしょう。それを神さまが明らかにされる前に、人が結論を出す必要は無いのです。

角笛の聖書的なつながり

では角笛を吹き鳴らす祭りは何に関連しているのでしょうか。それは明らかにテサロニケ人への手紙にある「最後のラッパ」とつながりがあります（1 テサロニケ 4 章 16 節）。また 1 コリント人への手紙の「復活（終わり）のラッパ」とも関連があります。そして黙示録にある「7つのラッパ」とも関わりがあります（黙示録 8 章・9 章）。この期間は大患難へと続く期間であり、パロウシア、キリストの再臨で頂点に達し——それとどこかでつながるものなのです。

ヘブライ語で黙示録のことは、“カゾン・ヨハナン（*Chazon Yohannan*）”といい、文字通りには“ヨハネの幻”という意味です。黙示録 8 章 1 節では第 7 の封印について書いてあります。イエスご自身が第 7 の封印を解かれます。そしてこの第 7 の封印から、7 つの出来事が啓示されます。そして御使いたちはそのラッパを吹き鳴らすのです。第 7 のラッパが吹き鳴らされる前、黙示録 11 章でふたりの証人または“2本のオリーブの木”が現れますが（黙示 11 章 4 節）、これは聖書の中の多くの人物によってあらかじめ示されていた人たちです。これはもちろん大祭司と王、ゼカリヤ 4 章で主の前に立つゼルバベルとヨシュアというふたりのイメージから取られたものです。子羊が封印を解くと、天に半時間ばかり静けさがあつたと黙示録 8 章 1 節には書かれてあります。

このふたりの証人が奉仕を成し遂げ、神に備えられたことを行うと最後のラッパが吹かれます。そしてそれが吹き鳴らされたとき、黙示録 11 章 15 節はこう書いています。

『第七の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、天に大きな声々が起こって言った。「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。』」（黙示 11 章 15 節）

この箇所についてミドラッシュ的なことが書れたクリスチャンの注解書は見つけることはできないでしょう。私はユダヤ人の観点から、ヘブライ的な観点から言いましょう——これはヨシュアとエリコでの物語を再現しているのです。ヨシュア記ではイスラエル人はエリコの周囲を 7 日間回らねばなりませんでした。7 日目には 1 日で 7 度回るように言われました。黙示録で 7 つの封印がありますが、7 つ目の封印から 7 の数の集合が出てきます。したがってヨシュア記と黙示録の両方で“7”が出てきますが、その最後には 7 の数

の集合があるのです。

レビ人たちが民をエリコの周りに歩かせているとき、彼らは完全に静かにしていなければなりません（ヨシュア 6 章 10 節）。黙示録では天に半時間の沈黙があったとあります（黙示録 8 章 1 節）。時間をどのように永遠に適用したらいいのでしょうか。ギリシア語にはふたつの時間を指す言葉“クロノス (*chronos*)”と“カイロス (*kairos*)”があります。時間をどうやって永遠に適用するかは私にとって摩訶不思議なことです。とはいえ、それが書かれてあることです。そうです、ヨシュア記において静けさがあり、黙示録においても静けさがあるのです。

次にヨシュアはふたりの斥候を遣わして、異邦人の女ラハブを救い出しました。なのでここでもふたりの証人が神の民を救い出しに行きます。同じパターンなのです。

祭司たちが最後の角笛を吹き鳴らすと城壁がくずれ落ちました。ヨシュア記にはその時どのようなことが言われたと書いてあるのでしょうか。『主がこの町をあなたがたに与えてくださった』（ヨシュア 6 章 16 節）黙示録で最後のラッパが吹き鳴らされたときは『この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。』（黙示録 11 章 15 節）とされています。

黙示録はヨシュア記を再現しているのです。このようなことを聖書学校や神学校で学ぶことはできません。それは異邦人教会が、ヘブライ的思考の代わりに、西洋的・ヘレニズム的な思考をもってユダヤ人の本を読んでしまっているからです。またユダヤ人たちが背教し、自分たちのメシアから遠く離れてしまったためにユダヤ人はこれを知ることはできません。これが角笛を吹き鳴らす祭りです。

ユダヤ人の暦において、この角笛は礼拝の年の始まり——私たちが“ハヨミム・ハノライム (*Hayomim Ha'noraim*)”——“畏敬の日”と呼ぶものを知らせます。これはタシュリクから 10 日間続く儀式で、大患難と関連があります。その日には“ショファー”という雄羊の角笛を吹き鳴らす人がいます。私たちはその人を“バル・テコア (*Bal Teqoa*)”と呼び、文字通りには“吹き鳴らす主人”という意味です。このヘブライ人の儀式は、きちんと角笛の音の長さが定められています。なんらかの形でこの角笛の音は黙示録でのさばきと関連があるのでしょうか。

贖罪の日

この儀式が行われると、贖罪の日に備えて自らのたましいを悩ませる人たちが出てきま

す。贖罪の日——ヨム・キプール——は次のように行われます。大祭司は2匹の山羊を取り、その上に手を置き、山羊の頭に民の罪を置きます。1匹はすぐにほふられ、もう1匹は荒野に追いやられ民を罪から遠ざけます。しかしイエスの時代になると、2匹目の山羊を荒野に放す代わりに、それを宿営の外に連れ出し、崖の上から落とすことによっていけにえとしていました。その前に彼らは神殿から緋色の帯を取り、その山羊に結び付けました。大祭司が贖罪の山羊——“ハセイル ハアザゼル (*ha seir ha'azazel*)” に民の罪を負わせた後、それをエルサレムの通りで見世物にします。民は自分たちの罪のためにそれにつばをかけ、足で蹴り、棒で叩きます。その後山羊を連れ出して殺すのです。これは主イエスに起こったことです。

それにもかかわらず、ユダヤ人は自分たちのメシアを退けたために、自らの信仰の意味を理解していません。またパウロがローマ 11 章で起こってはならないと警告したこと、異邦人の教会が自分たちのルーツを忘れるということが起こりました。彼らは自分たちのルーツを忘れてしまい、どこに向かっているか分かっていません。

しかし、これが贖罪の日です。

私たちはみな子羊の血について知っています。しかしなぜ山羊の血が流されるのでしょうか。レビ的ないけにえの制度の**すべて**はイエスの流された血の象徴であり、主のいけにえの異なった側面を明らかにしています。小鳥（鳩）がささげられるとき、流れる水の中でほふられなくてはならなかったということは、血で洗われることを象徴しています。雄牛の血は強いものが弱いものために死ぬことを表しています。汚れのない子羊は、傷や罪がひとつもない神の子羊を象徴しています。では贖罪の山羊はどのようなのでしょうか。どうして子羊の血とともに山羊の血が必要なのでしょうか。

ヘブライ語では罪を表す基本単語がふたつあります。それは“ペシャ (*pesha*)” と “ケット (*chet*)” です。ギリシア語でこれに相当する言葉は“ハマルテマ (*hamartema*)” と “ハマルタノ (*hamartano*)” です。前者は“十分に達しない——的を外す”という意味であり、後者は“行き過ぎる”という意味です。3番目のヘブライ語の単語は“ブルット (*burut*)” といい、“知らずに犯した罪”という意味です。ヘブル 9 章 7 節を見てみましょう。

『第二の幕屋 [至聖所] には、大祭司だけが年に一度だけ入ります。そのとき、血を携えずに入るようなことはありません。その血は、自分のために、また、民が知らずに犯した罪 (*burut*) のためにささげるものです。』(ヘブル 9 章 7 節)

キリストの血は私たちの**すべての罪**を洗い流します。子羊の血はすべきではないことを

犯した罪、山羊の血はすべきことをしなかった罪に関係があります。子羊の血はどちらかという主に救われる前にしたことと関係があり、山羊の血は救われた後——より正確には**するの**に失敗したこと、知らずに犯した罪と関係があります。

カリスマ運動の中にはカトリック教徒で新生した人たちがいます。その新生したカトリック教徒がミサに行くたびに彼らは罪を犯しています。それは偶像礼拝と迷信を信じる罪に加わっているからです。彼らがロザリオの祈りや死者に祈りを唱えるたびにそれは知らずに犯した罪かもしれませんが、罪であることに変わりはありません。イエスキリストはその罪のために死ななければなりません。一旦それが間違ったことだと知らされたなら、その罪は知らずに犯した罪ではなく、すべきでないことをした罪となります。その罪は私たちが神から遠ざけ、イエスキリストが死ななければならなかった罪です。すべてがイエスキリストの血についてですが、イエスキリストの血はすべてのものに有効です。このために子羊の血と山羊の血があります。

さて、贖罪の日とは次のようなものです。ユダヤ人はこの日に自分のたましいを苦しめ、前の年に自分が犯した罪を思い出します。そしてこの時期に今年1年間、いのちの書に名前が記されるということが伝統として言われています。

ヨム・キプールにはユダヤ人はとても興味深いふたつのことをします。彼らはアラム語である祈りを唱え出します。それはヘブライ語ではなく、アラム語で“*コル・ニドレ (Kol Nidre)*”といます。コル・ニドレとは“すべての誓い”という意味であり、神に対して果たさなかった誓いのことです。ラビの伝統によるとそれはスペインの異端審問でローマ・カトリック教会がスペインにいるユダヤ人に「カトリック教徒にならなければ命を取る」と言ったときにさかのぼると言われています。そして強制的に洗礼を受けさせられたユダヤ人たちは「神はわれらを赦してください」と言ったということです。しかしその祈りがアラム語、第二神殿期のイスラエルのユダヤ人の話し言葉であったため、その起源はより古いものであるということが分かります。これが主に対して果たさなかった誓いというものです。

贖罪の日にユダヤ人が行うふたつ目のことは、ヨナ書を朗読することです。ヨナとはご存じの通り、三日三晩大きな魚の腹の中にいた後、そこから出てきた——主イエスキリストの復活の象徴でした。

西洋の聖書解釈法——西洋的な聖書解釈の方法——は16世紀の人間主義からきたものです。改革者は基本的にキリスト教徒であり、人間主義の学者たちでした。そして彼らは「聖書に多くの適用があるが、ただひとつだけの解釈しかない」というようなことを言い

ました。これは間違っています。ラビたちは**複数の解釈**があると語りました。イエスは『預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません』と言われました（マタイ 12 章 39 節、16 章 4 節、ルカ 11 章 29 節）。ここで共観福音書の中のひとつの箇所からそれを読んでみると、ヨナのしるしとは 3 日間大きな魚の腹の中にいたヨナが、象徴的によみがえったことであるとあります（マタイ 12 章 40 節）。一方で、イエスは他の箇所でユダヤ人が悔い改めなかったときにニネベの人々——異邦人——は悔い改めたということを語られました（ルカ 11 章 32 節）。ヨナのしるしとは、2 つのはっきりと違うことを意味していますが、2 つとも同様に有効なものだったのです。西洋キリスト教界は解釈はひとつだと言いますが、ラビであったイエスはそれは間違いで、2 つ以上の意味があると語っています。そしてそれらは矛盾することがなく、意味また解釈において同等なものなのです。

仮庵の祭り

ついにその時がやってきます。雨は止み、作物はたわわに実り、収穫にふさわしい時期となります。第二の収穫期が来るのです。ペンテコステの日には 3 千人が救われ、最初の収穫が来ました。そしてこの時期が第二の収穫期なのです。

ヘブライ人は荒野で神が与えられたものを思い出すときに、幕屋に入ります。そしてスカー (*Sukkah*) と呼ばれる幕屋を作り、1 週間の間ずっとその中で食事を取ります。そこで伝道者の書——メギラー・コヘレト (*Meggilah Qoheleth*) ——神の哲学を読むのです。

ドイツ人は自分たちの哲学を持っています。ドイツは 18 世紀のヘーゲルやフィヒテ、シェリングなどの理想主義者たちを抱えています。またイギリスでは功利主義がありました（ベンサム、ミル、オーウェンら）。ギリシアにはアリストテレスやプラトンなどの哲学者がいました。一方で神の哲学は伝道者の書です。この世の知恵は役には立たないので信頼してはなりません。神を愛し、その戒めを守るのです。悪い状況で最善を尽くすこと。この世に心を決めてはなりません。もし富んでいるのなら、自分は貧しいと考えるのです。人は管理人にしかすぎず、自分と共に富を持つていくことはできないからです。もし貧しいのなら、自分は富んでいると考えましょう。あなたはキリストとの共同相続人だからです。この世のことを忘れるのです。この世は一時的でしかありません。幕屋のうちに宿り、メシアが来られるときに自分のものとなる約束の地を待ち望みましょう。これが神の哲学です。この世は**自分たちの哲学**を持っており、神は**神の哲学**を持っておられます。

この世は独自の心理学を持っています（フロイトやユング、マズローなど）、そしてそれはある程度の真理——基本的に罫に引き込むためのエサであることを分らせないようにす

るのに十分な真理を含んでいます。いんちきを信じ込ませるのに十分な真実を有しているのです。一方、神の心理学は箴言です。人が政治やビジネスなど——すべてのこと——どのように考え、振舞うかといったことを知りたいなら箴言を読んでください。箴言は聖書の心理学です。また伝道者の書は聖書の哲学です。

ユダヤ人は神の哲学を伝道者の書の中から読み取ります。そしてその中にはユダヤ人の例祭が含まれています。仮庵の祭りの次の日には——私たちが“シムハット・トーラー (*Simchat Torah*)”と呼ぶもの——があり、創世記 1 章 1 節に戻る年 1 度の祭りを祝います。ユダヤ人は旧約聖書を一年周期で朗読し、仮庵の祭りの次の日に創世記 1 章 1 節に戻るのです。

さてその時期には湧き水、マイム・ハイムが湧き出しています。ヨハネ 7 章はこの時期に位置しています。聖霊の象徴として、その湧き水はエルサレムの水の門を流れて、ユダヤ人はこのときに聖書を読むのです。

仮庵の祭りの適用

30 年に及ぶカリスマ派の刷新運動の後、なぜリバイバルや革新が起きないのでしょうか。みことばを見てみましょう。

『民はみな、いっせいに、水の門 [ヨハネ 7 章と同じように、湧き水であるマイム・ハイムが湧き出しています。これはエゼキエル 47 章のイメージから取られています] の前の広場に集まって来た。そして彼らは、主がイスラエルに命じたモーセの律法の書を持って来るように、学者エズラに願った。そこで、第七の月の一日目に祭司エズラは、男も女も、すべて聞いて理解できる人たちからなる集団の前に律法を持って来て、』(ネヘミヤ 8 章 1 節-2 節)

なぜ聞いて理解できる人たちが来たかあるのでしょうか。これはバビロン捕囚以降のことです。民はアッカド系の言葉——カルデア語、アラム語——を話していました。しかし老人たちや宗教指導者たち、レビ人たちしかヘブライ語を知らなかったのです。

『水の門の前の広場で、夜明けから真昼まで、男や女で理解できる人たちの前で、これを朗読した。民はみな、律法の書に耳を傾けた。学者エズラは、このために作られた木の台の上に立った。彼のそばには、右手にマティテヤ、シェマ、アナヤ、ウリヤ、ヒルキヤ、マアセヤが立ち、左手にペダヤ、ミシャエル、マルキヤ、ハシユム、ハシユバダナ、ゼカリヤ、メシュラムが立った。エズラはすべての民の面前

で、その書を開いた。彼はすべての民よりも高い所にいたからである。彼がそれを開くと、民はみな立ち上がった。エズラが大いなる神、主をほめたたえ、民はみな、手を上げながら、「アーメン、アーメン」と答えてひざまずき、地にひれ伏して主を礼拝した。ヨシュア、バニ、シェレベヤ、ヤミン、アクブ、シャベタイ、ホディヤ、マアセヤ、ケリタ、アザルヤ、エホザバデ、ハナン、ペラヤなどレビ人たちは、民に律法を解き明かした。その間、民はそこに立っていた。彼らが神の律法の書をはっきりと読んで説明したので、民は読まれたことを理解した。』(ネヘミヤ 8 章 3 節-8 節)

これは通訳です。彼らは原文の意味を強調しました。だからこそ、私は原文のギリシア語とヘブライ語を最優先にするのが重要だと考えるのです。そして 14 節、

『こうして彼らは、主がモーセを通して命じた律法に、イスラエル人は第七の月の祭りの間、仮庵の中に住まなければならない、と書かれているのを見つけ出した。』

また 18 節、

『神の律法の書は、最初の日から最後の日まで、毎日朗読された。』

このイスラエル人たちは 7 日間聖書会議を開き、一日中聖書の学びをしていました。

湧き水が流れ出したとき、彼らは神の律法を読み、それを学び、民に原語からそのままの文字通りの意味を示しました。その後民は「アーメン、アーメン」と言い、地にひれ伏して、礼拝したと 6 節には書かれてあります。

湧き水が流れ出した後、彼らはみことばのもとに行き、その後に礼拝をしました。ここから分かるのは“神学”が無ければ“礼拝”はあり得ないということです。正しい教理なしで、正しい礼拝が存在することはありません。もう一度いいます、最初に湧き水（生きた水）が湧き出で、次に神のことばを学び、その後礼拝をしたのです。

今日はどのようなことが行われているのでしょうか。「こんなものいらないじゃないか、ハレルヤ！」と言ってはいないでしょうか。現代のカリスマ派運動とほとんどのペンテコステ主義は、神を礼拝することではなく“礼拝”のための礼拝となっています。ほとんどの賛美——歌詞や曲——特に“ドミニオン・チャーチ”では——聖書的ではないことさえ歌われています。このためにリバイバルは起こらず、一時的な流行がはやるだけで、愚かなことが起こっています。

聖書中に記されたユダヤ人の例祭は千年王国を指し示しています。ゼカリヤ 14 章を読み、それをキリストがどのように成就されるかを見てみましょう。

『エルサレムに攻めて来たすべての民のうち、生き残った者はみな、毎年、万軍の主である王を礼拝し、仮庵の祭りを祝うために上って来る。』(ゼカリヤ 14 章 16 節)

18 節では彼らは

『…仮庵の祭りを祝いに上って』

19 節でも

『…仮庵の祭りを祝いに上って』とあります。

これは別名“幕屋の祭り”です。ヘルモン山でイエスのみ姿が変わったとき、そこにモーセとエリヤがいたことを覚えているのでしょうか。ペテロは何をしようとしたでしょう。彼は3つの幕屋を作りたがっていました。ペテロは「これがそうだ！モーセとエリヤ、それにメシアがいる。千年王国だ」と思ったことでしょう。神の国がやって来たと思っていたのです。そうです、ユダヤ人たちは“神の国は今ここに”という神学を持っていました。ひとりのメシアがふたつの到来をするということを彼らは理解できなかったのです。

これは私たちにとってどのような意味なのでしょう。あなたや私にとって。またあなたの家族や私の家族にとって。あなたの教会や私の教会にとって。私たちにとってどのような意味を持っているのでしょうか。見てみましょう。

備えをする

イエスは最初の到来において、春の祭日をあますところなく**完全に**成就しました。イエスこそが汚れのない子羊であり、また復活の初穂、もちろんご自分の体に聖霊が注がれるのを見た方でもあります。イエスは同じように秋の祭日を完全に成就されます。そしてもうすでにその事を行い始めています。ユダヤ人たちは大患難のために自分たちの地に戻りつつあります。彼らは祝福のためにイスラエルに戻るではありません。ユダヤ人たちはその地に大患難のために戻って行くのです。

キリストの最初の到来に備えるために、ヘブライ人たちは春の祭日の意味を悟らなくてはなりませんでしたが、彼らは悟りませんでした。私たちはというとメシアの再臨に備えるために、秋の祭日の意味を悟らなくてはならないのです。しかし全般的に見て私たちは

それを理解しているとはいえません。

角笛を吹き鳴らす祭りは“口に角笛を当てよ”ということです（ヨエル 2 章 1 節）。『町で角笛が鳴ったら、民は驚かないだろうか』（アモス 3 章 6 節）。中東で起こっている出来事を見ると、ローマ帝国だった国々が再統合されるのを見ると、教会内の今の欺きのレベル——ペンサコーラ・リバイバル、“神の国は今”、“名を挙げて要求しなさい”、エキュメニズムなど——これらのことを見ると、またひとりやふたりではなく、何千何万のユダヤ人がキリストに立ち返っているのを見ると、今こそが角笛を吹き鳴らすときなのです。

人類——特に救われていないすべての人——の時間はもう少なくなっています。時計の針は再び動き始めているのです。キリストの再臨に備えるため、私たちは角笛を吹き鳴らすこと、すなわち終末論を用い、聖書の預言を使い、キリストの再臨を人々に警告しなければならないのです。

ハル・リンゼイの『地球最後の日 “*The Late, Planet Earth*”』という本を知っているでしょうか。私はこの本が最初出てきたときに完全には賛成せず、今もそうであることに変わりはないのですが、リンゼイが語っていることはほとんどの場合正しいのです。この本を通してどれほど多くの人々が救われたことでしょうか。

ニュージーランドのバリー・スミスにいつも賛成できるというわけではありませんが、彼はたいていの場合正しいことを言っています。終わりの日の出来事を用いて人々に証をすることは効果的な伝道の方法です。今角笛を吹き鳴らすのです。しかし、それは始まりにしかすぎません。

たましいを悩ませる畏敬の日——ハヨミム・ハノライム、コル・ニドレ。贖罪の日はイスラエルの救いだけではなく、キリストの再臨と大きく関係があります。救われていない人たちに子羊の血について知らせる必要があるのは事実です。しかし山羊の血についてはどうでしょうか。彼らは山羊の血も必要としています。イエスの血は犯したすべての罪、コル・ニドレ、果たさなかつた誓いから私たちをきよめます。

私は何度、聖であられ、今存在しておられる神の前で、祈りの生活を怠ったり、聖書通読を怠けたことでしょうか。私は何度、自分の妻にカッとならないと神に約束したのに、家に帰って何かがあったり、妻が何かをしてカッとになってしまう、このようなことを何度繰り返すのでしょうか。私は何度、「これもしない」「あれもしない」と神に約束したことでしょうか。1年間でどのくらい果たさなかつた誓いがあるのでしょうか。数えることもでき

ません。これがコル・ニドレです。私にはいけにえの血が必要です——子羊の血、山羊の血、どれもすべてはイエスの血です。イエスの再臨に備えるために、ただ未信者が悔い改める必要があるだけでなく、教会が、また私とあなたが悔い改める必要があるのです。私たちが悔い改める必要があります。

仮庵の祭り。私たちは仮庵の中に宿ります。幕屋の中に住むのです。私たち家族がこの例祭を祝うとき、仮庵の中に入り、聖書を読み、その中で食事をします。

終盤になると長男が呼ばれ、ひとつの仮庵を何週間か前にしげっていた葉や花で作ります。しかしそれはもう枯れています。草は枯れ、花はしぼみます。そして息子呼んで、こう言うのです、「ボウ・ベネ・ボウ (*Bow bene bow*)” —— “来なさい、息子よ、来なさい” 屋根を見たかい。その上には神がおられるんだよ。屋根、仮庵のスカーを見たかい。あれがこの世における私たち、そしてお前の人生だ。草が数週間前に緑だったのを覚えているかい、また先週にはまだ花が咲いていたのを覚えているかい。見てみなさい、枯れているだろう。そうだ、これがこの世での私たちの人生だ、息子よ。この世に望みを置いてはならない。執着してはいけない。仮庵の中で暮らさなさい。この人生にも、この世にも頼ってはならない」そして聖書を取り、息子にこう言います、『草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことは永遠に立つ』(イザヤ 40 章 8 節)。そうして聖書を渡すのです。

私はユダヤ人への宣教師になり 20 年たちました。そして神の恵みにより、数多くのユダヤ人たちとイエスを受け入れるように祈りました——その中にはユダヤ人の薬物中毒者から、ユダヤ人医師、ユダヤ人科学者や、実業家、知識人など、あれやこれやのユダヤ人がいました。私がいつも驚くのが、彼らの民族としてのアイデンティティー、宗教、文化の中で、ずっと真理は彼らのすぐ目の前にあったということです。しかし、教会、福音的な教会の中にある同じ問題に私は変わらないくらい驚きます。いつも真理は私たちの目の前にあるのですが、ただそれが見えていないのです。

時が来た

主イエスは最初の到来で、春の祭日を成就されました。そしてまた帰って来られ、秋の祭日を成就されるのです。そのときには御霊の注ぎがあり、必ず収穫があります。今こそ角笛を吹き鳴らすときであり、福音を伝える手段として終わりの時代を用いるべきなのです。

70 年代に出されたデイビッド・ウィルカーソンの映画、『アルマゲドンへの道 “*The*

『*Road to Armageddon*』のことを私は思い出します。私が大学にいるとき、それを人に見ただけで、見た人たちは恐れを抱いていました。今こそ角笛を吹き鳴らすときなのです。

贖い、畏敬の日、コル・ニドレ、神に果たさなかった誓い——主はしみの無い教会のために戻ってきません（2ペテロ 3 章 13 節–14 節）。みなさんのことは分りませんが、私には取り除くべきしみがたくさんあります。主はしわのよった花嫁を望んではいません。

そして今こそ仮庵に宿るときであり、この人生とこの世に期待を抱き、信頼すべきではありません。私はあなたが一文無しでもかまいません、必要を満たしてくださる神を信頼しましょう。キリストの共同相続人なのですから——あなたは富んでいます。また 1 億 5 千万ドル（150 億円）持っていたとしてもかまいません。オーストラリアのある弁護士は一夜で 1 億 2 千万ドル（120 億円）失いました。今日あっても、明日には無くなってしまうものです。富に執着せずに、仮庵に宿りましょう。それを持って行くことはできません。持って行くことのできる唯一のものは、生きている間にキリストに捧げたものです。今こそ仮庵に宿るときです。

今こそ角笛を吹き鳴らし、神に果たさなかった誓いを認識するときであり、仮庵に宿るときです。主イエスは最初の到来において春の祭日を成就されましたが、秋の祭日は私たちの目の前で成就されつつあるのです。

忠実な残りの者を除いて、ユダヤ人はメシアの最初の到来に備えていませんでした。また教会の忠実な残りの者たちだけが再臨に備えをします。あなたとあなたの教会、親愛なる人たちへの私の祈りは、神の恵みにより、あなたの家族と私の家族がその中の一員となることです。

神の祝福がありますように。